連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「怡雲宗悦～義鎮を『威気凛然』と絶賛～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2024 年 3 月 22 日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

怡雲宗悦

怡雲宗悦像（瑞峯院蔵）

怡雲宗悦は、京都の大徳寺瑞峯院の開祖徹岫宗九の法を継ぎ、16世紀半ばに同寺住持となった臨済宗の僧侶です。大友義鎮（宗麟）が建立した瑞峯院は、室町時代の方丈建築の貴重な遺構で、唐門と共に国の重要文化財に指定されています。師の徹岫と同様に義鎮のあつい帰依を受けた怡雲は、義鎮が豊後国臼杵（臼杵市）に創建した寿林寺の開山住持としても招かれました。

写真は、元亀元（1570）年に描かれた怡雲の頂相（禅僧の肖像画）です。曲彔という法会用の椅子に座り、納衣の上に袈裟を着て、右手に竹篦（禅の修行者の肩を打つための竹製の棒）を持つ姿で描かれています。

義鎮を「威気凛然」と絶賛

元亀2（71）年の史料によると、義鎮に招かれた怡雲は、自身のみでなく、若い頃の狩野永徳や後藤徳乗、吉田牧庵ら、後に戦国・織豊期日本トップクラスの絵師・金工家・薬師となる複数の人物と共に、豊後を訪問しています。京都の有力寺院の禅僧・芸術家と地方の有力戦国大名のつながりの実態が、そこにうかがえます。

さらに、2人の関係は、同じ瑞峯院が蔵する義鎮肖像に添えられた賛（画賛）を読むことで明らかです。それによると、狩野派による肖像画と怡雲による賛は、義鎮が58歳で没した天正15（87）年5月直後の「菊月（9月）」に描かれたことが分かります。

義鎮が仏門に入って剃髪し、法名「宗麟」を名乗ったのは、永禄5（62）年、33歳の時です。賛文には、その義鎮の仏教崇拝により、武威と正義が九州を席巻し、大友の家名が広く天下に知れ渡り、繁栄したと記しています。また瑞峯院の建立と大徳寺へのあつい信仰をたたえ、画中の法体の義鎮を「威気凛然」と褒めたたえています。

一般に、義鎮はキリシタン大名の代表に位置づけられ、49歳だった天正6（78）年にキリスト教の洗礼を受けてからの晩年は、キリスト教を狂信して日本古来の神社仏閣を破壊したなどと伝えられています。

しかしながら、実のところ、洗礼後も、大友家歴代当主が数百年にわたって祭ってきた仏教や神道への崇敬を怠ってはいませんでした。亡くなった義鎮の肖像画に生前の諸政策を絶賛する賛を怡雲が記した事実は、その証左です。もし無差別に寺社を破壊したならば、怡雲から「瑞峯院殿瑞峯宗麟大居士」の戒名を授かることはなかったでしょう。怡雲の賛は、仏教・神道・キリスト教という複数の宗教を習合的に理解、利用しようとした戦国武将大友義鎮の実体を物語っています。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝